
ヘタ鬼 ～トリップ!!皆で脱出しようね。～

翠風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタ鬼 ヽトリップ!!皆で脱出しようね。ヽ

【Nコード】

N8761Y

【作者名】

翠風

【あらすじ】

『液晶退けえええー!!!!』

【ヘタ鬼】の動画を見ていた二人の少女、黒羽とホワイト。二人は【ヘタ鬼】の世界にトリップして、皆を助けたいと望んでいた…。そんな彼女達の前に突然>彼くが現れる。>彼くは彼女達に「皆を助けて欲しい。」と頼み、二人はその頼み事を引き受ける。

『『大丈夫。』』

『安心して下さい。私達が輪廻を終わらせます。』

『僕達に任せてよ♪もう、巻き戻させたりしないからさ☆』

果たして、イレギュラーである二人の少女は、歪んだ空間から皆を救い出すことが出来るのか？

プロローグ 、『液晶、そこを退け!!』 、『

日本のどこかの家

パソコンの画面を食い入るように見つめる二人の少女がいた。どうやら、何かの動画を見ているようだ。

?? 『……………うわあああ————ん!!!!!!

液晶退けえええ————!! (泣』

?? 『!?! (ビクッ』

突然、黒髪の少女がパソコンに向かって叫び始めた。
いきなりすることに隣に座っている白髪の少女は驚き、ビクリと大きく肩を震わせた。

?? 『ちょ、ちょっとホワイト、気持ちは分かるけど落ち着いて…。』

?? 『黒羽……。だって…だって————!! (泣』

白髪の少女…黒羽は黒髪の少女…ホワイト・フェザーことホワイ

トを宥めるが、ホワイトは尚も泣き叫んだ。

ホワイト『僕の手を使えばトニーもどきを倒せるかもしれないのに……』
わああー！ やっぱ液晶退けえー！ 皆を助けるんだー！！ (泣)』

黒羽『…私も同じ気持ちだよ。皆さんを助けられるなら助けたい…。』

そう言うとき黒羽は視線をパソコンの画面へと戻し、とても哀しそうな顔をした。

ホワイトも一旦泣き止み、黒羽の視線をたどって視線をパソコンの画面に戻し…

ホワイト『うわああー！ん！！』

また泣き始めた。

黒羽『……………グスッ。』

さっきまで我慢していた黒羽もつられて泣き始めてしまった。

現在、黒羽とホワイトは【ヘタ鬼】の動画を見ている。

黒羽『……でも、ホワイトの言う通り液晶が退いてくれたら良いのにね……。』

黒羽はポツリと呟いた。
すると……

「……助……やって……れ。」

二人 ㄱ ㄱ ! ? ㄱ ㄱ

どこからともなく、声が聞こえてきた。

黒羽「…今、何か聞こえた？」

ホワイト『黒羽にも聞こえた？…ってことは僕の気のせいじゃないんだね…。でも、一体どこから？』

「……だ……。」

二人 ㄟ ㄟ ! ? ! ? ! ? ! ?

二人で首をひねっていると、また声が聞こえてきた。そして二人は声のする方：パソコンの方に顔を向けた。するとそ

ここには…

黒羽『えっ！？…君は………』

ホワイト『神聖ローマ！？！？』

パソコンの画面に映っていたのは【ヘタリア】の登場人物で、消えてしまったはずの少年…神聖ローマだった。

黒羽『どうして神聖ローマ君がここに？』

黒羽はパソコンの画面に神聖ローマが現れたことに驚きながらも、至って落ち着いた口調で聞いた。

神聖ローマ「…お前達に頼みがある。」

ホワイト『…なあに？』

いつもと違い、真剣な表情をするホワイト。黒羽も神聖ローマをじっと見つめる。

神聖ローマ「…イタリアを…皆を…助けてやって欲しいんだ。」

二人『『いい（です）よ。』』

神聖ローマ「!？」

あまりにも返事が速かったので、神聖ローマ驚いていた。

神聖ローマ「本当にいいのか？」

ホワイト『だって僕達、皆を助けたいんだもん。ね、黒羽？』

黒羽『うん。それにさっきその話をしたばかりだし…というか、神聖ローマ君は私達がイタリアさん達を助けたいって話をしたから来てくれたんでしょ？』

神聖ローマ「…ああ、そうだ。」

黒羽の言葉に神聖ローマは少し苦い顔をしながら頷いた。

ホワイト『じゃあ、早速行こ（黒羽『あっ!!』』

黒羽は何かを思い出したように大きな声を出し、俯いた。

ホワイト『どうしたの！？黒羽！！』

黒羽『いや、その…。』

ホワイト『？』

黒羽『私…戦えるかな？』

ホワイト『あっ…。』

ホワイトも『そう言えば』と、困ったような表情をした。

黒羽『ホワイトは魔法を使えるし、戦いにも慣れてるけど、私は…。
』

神聖ローマ「それなら、問題無い。」

黒羽『えっ…。』

神聖ローマ「俺が力をやる。そうすれば、お前も（黒羽『黒羽。』
？」

黒羽『私のことは黒羽、って呼んでいいよ。（ニコッ』

ホワイト『僕はホワイト、でいいよ。（ニイッ』

神聖ローマ「／／／分かった。…話を戻すぞ。俺が力をやれば、
黒羽も魔法を使えるようになるし、武器なんかを使って戦えるよう

にもなる。」

黒羽『へえ…ありがとう。神聖ローマ君は凄いだね。』

神聖ローマ「いや、別に…。それに礼を言うのは俺の方だ。こんな無茶苦茶な願いを聞いてくれて…本当にありがとう。」

神聖ローマはペコリと頭を下げた。

二人（／＼／＼かわいい…。）

見たことのない神聖ローマの行動に二人は小さく感動していた。

ホワイト『ねえねえ、神聖ローマ?』

神聖ローマ「?何だ、ホワイト。」

ホワイト『神聖ローマは僕が何なのか知ってるの?』

神聖ローマ「…知ってる。」

ホワイト『ふん…そっか♪ならいい♪』

黒羽『ホワイト…。』

少し、沈黙が続く。

神聖ローマ「…では、お前達二人を【あの館】へ送るぞ！」

黒羽『うん。』

ホワイト『よしきた！』

黒羽『ホワイト…それ、漁師さん達が使う言葉…。（汗）』

ホワイト『えへへ…♪』

神聖ローマ「…link…offnen…!!」

神聖ローマが何か呪文のような言葉を呟くと、パソコンの画面からまばゆい程の光が溢れだし、黒羽とホワイトを包んだ。そして、光が収まる頃には二人の姿は消えていた。

神聖ローマ「…頼んだぞ、二人とも。」

パソコンの画面はブツツと音を立てて、消えてしまった。

主達を無くした家は静寂に包まれるのだった。

設定（前書き）

主人公達の設定です。なんかもう、無茶苦茶な感じですね
…。

設定

設定

名前…千晶^{ちあき} 黒羽^{くれば}「母方」

＞黒羽・C・オブシディエン＜「父方」

容姿…白い髪に緋色の瞳の少女。髪は肩にギリギリ届くくらいの長さ。

普段は年齢よりも大人びて見えるが、笑うと年齢より幼く見える。可愛い。ホワイト・フェザーと同じ顔をしている。

服装

- ・白のトレンチコート（丈短め）
- ・黒のショートパンツ
- ・白のブーツ
- ・ブレスレット（水晶を抱く黒い竜の形）
- ・胸元に紅い大きなリボン

身長…161.7cm

年齢…16歳（高校1年生）

性格…優しい。落ち着いた雰囲気を持っている。真面目。

1人称…私

その他…話すときは基本、敬語。

ホワイト・フェザーを「ホワイト」と呼んでいる。友

達に薦められて【ヘタリア】を知り、ハマった。それから【ヘタ鬼】

の動画も薦められて見て、みんなを助けたいと思っていた。

頭が良く、スポーツもそこそこできる。

一軒家にホワイトと一緒に暮らししている。家族は皆、他界している。

母親は日本人（黒髪に黒い瞳）、父親はアメリカ人（金髪に瑠璃色の瞳）だった。瞳の色は父方の祖母から遺伝した。昔は黒髪だったが、>ある事件<をきっかけにショックを受け、白くなってしまった。

名前…ホワイト・フェザー

容姿…黒い髪に瑠璃色の瞳の少女。髪は長く、ハンガリーくらいの長さ。人間ではないらしく、トリップ前の世界では透けていた。だが、トリップ後は実体を持っている。

可愛い。黒羽と同じ顔をしている。

服装

- ・黒のケープ
- ・深緑のショートパンツ
- ・白のハイソックス（長さは膝上）
- ・深緑のブーティー
- ・ブレスレット（水晶を抱く白い竜の形）

・首もとに紅い小さなリボン

身長..161.9cm

年齢..??

性格..明るい。常にテンションが高い。よくふざける。自分の思っていることははっきり言うタイプ。

1人称..僕。たまに私。

その他..誰に対してもタメ口で話す。

黒羽と一緒に【ヘタリア】や【ヘタ鬼】を見て、自分もハマった。

「ホワイト・フェザー」という名前は黒羽が付けてくれたと言っている。魔法を使える。また、戦いの経験があるらしく戦える。強い。

設定（後書き）

次は第一話です。

【あの屋敷】に到着します。

第一話 【あの館】へ到着（前書き）

予告通り、【あの館】に到着します。
内容はタイトル通りです。

第一話 【あの館】へ到着

黒羽『……ん……ここは……？』

神聖ローマ「起きたか？」

黒羽『…神聖ローマ君……！？何処にいるの！？』

黒羽は神聖ローマの声がすぐ近くから聞こえたので、てっきり隣にでも居ると思っていた。だが、近くに神聖ローマの姿は無かった。

神聖ローマ「右手のブレスレットを見ろ。」

黒羽『えっ？う、うん。』

黒羽は神聖ローマの指示通り右手に付けたブレスレットを見た。

黒羽『……あ……！？』

ブレスレットを見ると、水晶の部分に神聖ローマの姿があった。

神聖ローマ「俺は普段はで黒羽とホワイトのブレスレットの水晶の中で二人のことを見守っている。だが、必要なときには力を貸そう。」

黒羽『うん。…その言い方からすると、神聖ローマ君は私達のブレスレットを自由に行き来できるの?』

神聖ローマ「ああ…。」

黒羽の問いに、水晶の中で神聖ローマは頷いた。

ホワイト『…うゝん…!ここは!?!』

先程まで気を失っていたホワイトもようやく目を覚ました。

黒羽『おはよう、ホワイト。』

ホワイト『うん!おはよう、黒羽♪…で、ここはどこ?』

神聖ローマ「3階の図書室だ。」

ホワイト『へゝ、本当に【あの館】に来たんだね…:…て、えっ!?!神聖ローマどこ?!?』

黒羽『ホワイト、左手のブレスレットを見て。』

ホワイト『へっ?!うゝ、うん。』

ホワイトは黒羽の促すままに左手に付けたブレスレットを見た。

ホワイト『…あっ!?! 神聖ローマ!?! 何で水晶の中に居るの!?!』

神聖ローマはいつの間にか、黒羽のブレスレットからホワイトのブレスレットに移動していた。

神聖ローマ「俺は黒羽とホワイトのブレスレットの中を自由に行き来できる。」

ホワイト『へえー!?! すごっ!?!』

神聖ローマ「／／／いや、それほどでもない…。」

ストレートにほめられ、神聖ローマは少し照れた。

黒羽『…………。』

黒羽は二人のやり取りを横目に見ながら、何かをしていた。

ホワイト『…それじゃ早速トニーもどき退治にしゅっぱーっ!?!』

黒羽『お、おおー…？』

ホワイト『さ、神聖ローマも♪』

神聖ローマ「あ、ああ…おおー……。」「

ホワイト『もー！！二人とも元気ないなー。』

二人の元気のない「おおー」にホワイトは頬を膨らませた。

黒羽『ごめん、なんかこういうの慣れなくて…。』

神聖ローマ「…俺もだ…。」

性格が真面目な二人組は苦笑いしながら答えた。

ホワイト『全く…二人とも各自練習しておくように！』

黒羽『は、はい。』

神聖ローマ「わ、分かった。」

ホワイト『よろしい♪じゃ、行くよー。』

そして3人は図書室を後にするのだった。

廊下

ホワイト『そう言えばさー、黒羽…。』

黒羽『?』

廊下を移動中、ホワイトが黒羽に話し掛けてきた。

ホワイト『黒羽、戦えるの?魔法の練習とかしなくて大丈夫?』

黒羽は【この館】にトリップする前はただの女子高生だった。神聖ローマから力を貰ったとはいえ、まだ使ったことはな…

黒羽『大丈夫♪さっき練習したし、戦い方も頭の中に入ってるから。』

くも無かった。

ホワイト『いつの間に!?!』

黒羽『大体は夢の中。あとはホワイトが神聖ローマ君と話してるときに。』

ホワイト『夢の中?』

黒羽『そうだよ。(ニコッ)』

不思議そうな顔をするホワイトに黒羽は笑いかけた。

神聖ローマ「∴ということは上手く行っただってことか。」

ホワイト『へ?』

今度は神聖ローマの言葉にホワイトは不思議そうな顔をした。

神聖ローマ「俺が「眠っている間に訓練ができる空間」を黒羽の頭の中に作ったんだ。なんなら、ホワイトにも作ってやろうか?」

ホワイト『うん!!!作って作って!!!』

黒羽『私の頭の中に戦い方を入れてくれたのも神聖ローマ君だよな』

？
』

神聖ローマ「そうだ。」

ホワイト『神聖ローマすげー！！……よし、僕も頑張るぞ♪』

ホワイトは両手をグーにして、上に掲げた。

神聖ローマ「……すまないが、力を使いすぎて疲れたから俺は少し休むぞ……。」

黒羽『あつ、うん。ゆっくり休んでね。』

ホワイト『お休み☆』

神聖ローマ「……………」

黒羽『…眠ったみたいだね。』

ホワイト『だね。』

黒羽とホワイトは顔を見合わせて、笑った。

ギャー！ー！ー！ー！ー！
ウワ！ー！ー！ー！ー！ー！

二人『！！』

1階の玄関に続く階段へ向かっていると、下から悲鳴が聞こえてきた。

黒羽『ホワイト！』

ホワイト『うん！！』

二人は悲鳴のした方へ急いだ。

イタリアside

俺「ハアツ…ハアツ…。」

今、俺は「あいつ」から逃げている。

俺「…!! 全く…しつこいなあ…。」

周りには俺以外、誰も居ない。
俺は立ち止まり武器を構えた。

俺「…来るんなら来れば？」

そう言うと、あいつは凄く速さで俺に向かって来た。
俺はあいつの攻撃に備え、武器を強く握りしめた。すると…

?? 『ていやーー!!』

キンッ

俺「!？」

突然、後ろから槍を持った黒髪の女の子が現れてあいつに斬りかかった。

俺「えっ…えっ…!?!」

?? 『うわ…思ってた以上にかたっ!! なら…これでどうだ!!』

混乱する俺をよそに、その子は槍を（どういう仕組みかは分からないけど）大剣に変えて、再びあいつに斬りかかった。

ザクッ

?? 『おっ! いけたいけた♪』

トニー(?) 「グギャー」

あいつは少し怯んだ。

?? 『大丈夫ですか? 茶髪のお兄さん。』

俺「えっ!?!」

気が付くと、俺の隣にはさっきの子にそっくりな顔をした白髪の女の子がいた。

?? 『ここは私達に任せて逃げて下さい。』

俺「き、君達は一体…どうして…ここに…何で…。」

俺が聞くとその子は困ったような顔をして、答えた。

?? 『今はまだ言えません。…でも1つだけ言えるのは…

私達はあなた方の味方です。』

その子は一旦言葉を切り、俺の目をまっすぐ見つめ、とても優しい笑顔で言った。

俺「どういうこと?俺達の味方って?君達の名前は?どうやってここに来たの?ねえ!!」

?? 『…すみませんが強行手段に出させて頂きます…彼の者を我が意のままに…メニューバー!』

その子が呪文を唱えると、俺はの意思とは反対に走り出し、その場から離れ始めた。

俺「!?!何これ!?!体が勝手に!?!」

?? 『私の魔法ですよー!』

後ろを振り返るとあの子が叫んでいた。

俺「待って!! まだ聞きたいことが…。」

あの子達の姿がどんどん小さくなっていく。そして、俺の体は廊下を曲がり遂に見えなくなってしまった。

三人称 s i d e

黒羽『行つたね。』

ホワイト『うん。』

二人は顔を見合わせ、イタリアが向かった方向を見ながら呟いた。

二人『大丈夫。』』

黒羽『安心して下さい。私達が輪廻を終わらせます。』

ホワイト『僕達に任せてよ♪もう、巻き戻させたりしないからさ☆』

トニー(?)「ニガ、サ…ない……。」

黒羽『別に逃げませんよ。』

ホワイト『むしろ、そっちが逃げないでよね♪』

黒羽は魔導書を、ホワイトは大剣を構えた。

二人の口元には笑みが浮かんでいた。

第一話 【あの館】へ到着（後書き）

第二話は、明日投稿の予定です。
主人公達がトニーもどきと戦います。

閑話 神聖ローマがくれた力について（前書き）

すみません。初めての戦いの前に閑話を入れさせて頂きます。

ホワイトが黒羽に神聖ローマからどんな力を貰ったか質問する話です。

閑話 神聖ローマがくれた力について

イタリアとトニー（？）に遭遇する前のこと…

ホワイト『ねえねえ、黒羽。』

黒羽『？何？ホワイト。』

ホワイト『黒羽はどういう風に戦うの？』

ホワイトは黒羽から、黒羽は神聖ローマから力を貰い戦えるようになったとは聞いたが、具体的にどう戦えるようになったかは聞いてなかったことを思い出し、黒羽に質問した。

黒羽『あ…そう言えばまだ説明して無かったね。』

そう言うとき黒羽は懷から紙とペンを取りだし、サラサラと何かを書き始めた。

黒羽『…っと。私の戦い方を簡単にまとめると、こんな感じだよ。』

黒羽は先程何かを書いた紙をホワイトに見せてきた。

ホワイト『どれどれ…』

ホワイトは紙を覗き込んだ。紙には、次のように書かれていた。

- ・戦い方はそのときの「ジョブ」によって異なる。
- ・「ジョブ」とは職業のことである。
- ・「ジョブ」は一度に2つ、掛け持つことができる。
- ・2つの「ジョブ」の組み合わせにより、新たな「スキル」を使えるようになる。
- ・「スキル」とはジョブ毎に使える特別な技である。
- ・ジョブは「ジョブチェンジ」という魔法で自由に変えられる。
- ・「ジョブチェンジ」だけは、どの職業のときでも使える。

ホワイト『…なるほどね〜♪』

ホワイトは黒羽の書いた紙を読み、理解したようだった。

ホワイト『それで黒羽は今、何と何のジョブを掛け持ちしてるの？』

黒羽『私が今掛け持ちしてるのはウィザード（魔導士）とディーバ（歌姫）だよ♪』

ホワイト『ディーバ？』

黒羽『ディーバっていうのは、名前通り【歌声】で戦うんだよ。戦

い以外にも、回復や仲間のサポートも出来るんだって。』

ホワイト『わお！！：で、他にはどんなジョブがあるの？』

黒羽『そうだね：ソードナイト（剣士）やパラディン（聖騎士）、プリースト（僧侶）、アーチャー（弓手）なんかもあるよ。』

ホワイト『へー！！なら、その場に応じて戦えるんだね。』

黒羽『うん。：ってそれはホワイトも同じでしょう？魔法使えるし、武器も自由に出して使いこなせるし。』

ホワイト『まゝねえ☆』

ホワイトは黒羽の言葉に胸を張って答えた。

ホワイト『けど、やっぱり僕は武器で戦うのに慣れてるから、黒羽には魔法で援護して貰っていいかな？』

黒羽『いいよ。：というか、今の私のジョブじゃ援護しかできないから（汗）』

ホワイト『んじゃ、よろしく☆』

ホワイトは右手をグーにし、親指を上にしてニカッと笑いながら黒羽に向けた。

ギャー！ー！ー！ー！ー！
ウワ！ー！ー！ー！ー！ー！

二人『！！』

1階の玄関に続く階段へ向かっていると、下から悲鳴が聞こえてきた。

黒羽『ホワイト！』

ホワイト『うん！！』

そして二人は悲鳴のした方へ急ぐのだった。

閑話 神聖ローマがくれた力について（後書き）

次こそ、初めての戦いです。

第二話 初めての戦い（前書き）

二人がトニーもどきと戦います。ゲーム（テイルズシリーズ）の技が出てきます。

戦闘描写って難しいです…。

第二話 初めての戦い

ホワイト『さーてとつ、久々に暴れますか♪』

大剣を構えて、ホワイトは楽しそうに言った。

黒羽『初めての戦い…ちよつと緊張するな…。』

これが初めての戦いである黒羽は真剣な表情で手にある魔導書を見た。

ホワイト『お先に失礼♪』

ホワイトは早速、トニー(?)に向かって駆け出し大剣を振り下ろした。

ホワイト『ヤアッ!』

サッ

しかしトニー(?)はそれをいとも簡単に避け

トニー「…コワレロ…。」

ホワイトに攻撃を仕掛けてきた。

黒羽『危ない！ ホワイト！

聖なる光の障壁よ、我が仲間を護り給え…バリアー！！』

黒羽が呪文を唱えると、ホワイトの周りに蒼く透き通った大きなクリスタルのようなものが現れ、トニー（？）の攻撃を防いだ。

黒羽『大丈夫！？ ホワイト？』

ホワイト『お陰様で☆ナイス援護だよ、黒羽。』

黒羽『良かった…。（ホッ）』

ホワイトの無事を確認でき、黒羽は安堵の溜め息をついた。

ホワイト『あいつ、結構速いね…どうにか動きを止められればいいんだけどな…。』

黒羽『……！ ねえ、ホワイト。』

ホワイト『ん？なあに？。』

ホワイトの言葉に一瞬考え込む顔をした黒羽が、何か思い付いた顔をしてホワイトに話し掛けてきた。

黒羽『あいつの動きを止める術を使いたいから、少しの間、時間を稼いで貰えないかな？』

ホワイト『OK！任せてよ☆』

そう言うときホワイトは大剣をレイピアに変えて、トニー(?)に斬りかかりに行き、黒羽は詠唱の準備を始めた。

黒羽『……………戻って！ホワイト。』

トニー(?)からの攻撃にレイピアで応戦していたホワイトは、黒羽の声に反応し、黒羽の隣まで一気に跳んで戻ってきた。

黒羽『聖なる裁き、天より降り注げ…ホーリーランス!!』

黒羽が詠唱を終えると、何本もの光の槍が現れ、トニー(?)に降り注いだ。

トニー（？）「グキヤーーーーー!!」

トニー（？）は光の槍に串刺しにされ、動けなくなった。また、痛みに悲鳴を上げた。

黒羽『ホワイト! 止めを!!』

ホワイト『了解! 行っくよー!!』

ホワイトはレイピアを再び大剣に変えた。

ホワイト『月影斬!!』

ホワイトは大剣の先端が三日月の弧を描くように大きく振り回し、トニー（？）の額を狙った。

トニー（？）『グキヤアアーーーーー!!』

技は見事に命中し、トニー（？）は断末魔の悲鳴を上げ、倒れた。

ホワイト『よっしゃ!』

ホワイトは念のためトニー(?)から離れた。だが、トニー(?)は動かなかった。

なので、黒羽とホワイトは警戒しながらトニー(?)に近づいた。

黒羽『私達…やったの?』

ホワイト『うん。』

黒羽『トニー(?)を倒したの?』

ホワイト『そうだよ♪』

黒羽『……………ったー…。』

ホワイト『黒羽?』

黒羽『やったー!!』

黒羽は普段からは考えられないようなあどけない笑顔を見せ、ホワイトに抱き付いてきた。

ホワイト『おっと。』

ホワイトは思わず倒れそうになったが、何とか耐えた。

黒羽『やったー、やったー、やったー!!!』

ホワイト『ちょっと黒羽、落ち着いて。(汗)』

見たことのない黒羽の行動に戸惑うホワイト。

ホワイト『あ…!?! トニー(?) が!?!』

黒羽『えっ!?!』

ホワイトの言葉に黒羽はようやく離れる。

トニー(?) は二人の目の前でゆっくりと透けて行き、そして…

黒羽『…消えたね。』

ホワイト『…消えちゃったね。』

…消えてしまった。

黒羽『………………。』

ホワイト『………………。』

黒羽『…でも…。』

ホワイト『ん？』

黒羽はホワイトの方を見て微笑んだ。

黒羽『倒せて本当に良かった…。』

ホワイト『初めての戦いにしては上出来だったよ、黒羽。』

黒羽『ありがとう。』

ホワイト『よし、この調子でバンバントニー(?)を倒して皆を助けるぞ♪』

黒羽『ふふ…そうだね。頑張ろっか。』

二人は自分の武器を持ってない方の手をグーにして、コツンと相手の拳とぶつけた。

こうして二人は初めての戦いに勝利し、又、志を新たにすのだった。

第二話 初めての戦い（後書き）

駄文ですみません。

評価や感想を貰えると嬉しいです。

第三話 休憩。そして作戦会議（前書き）

タイトルとは内容が少し違うかもしれませんが。

第三話 休憩。そして作戦会議

ホワイト『ふう〜〜…。疲れた〜〜。』

黒羽『私も…。』

イタリアとの接触後、黒羽とホワイトはまた何体かのトニー(?)と戦い、休憩のため、4階のレバーがある部屋に来ていた。

ホワイト『黒羽もだいぶ戦い慣れてきたね。』

黒羽『うん。ウィザードとディーバはもう、ほぼ使いこなせるようになったと思うよ。あゝホワイト、怪我してる。ちょっと見せて。』

ホワイトの右肩にはトニー(?)に引っ搔かれたときにできたのであろう切り傷があった。

ホワイト『ん? いや、これくらい平気だよ♪』

黒羽『ダメ、見せなさい。』

ホワイト『むー…は〜い。』

ホワイトは少々傷を黒羽に見せた。

黒羽『…………癒しの光、今ここに集え…ヒール!』

黒羽が呪文を詠唱すると傷口にかざした手から淡い黄色の光が溢れ、ホワイトの傷はみるみる治っていった。

黒羽『…はい!おしまい。もう動いていいよ。』

ホワイト『ありがとう♪…なんかもう本当に極めたね、黒羽。』

黒羽『いや、極めたってほどではないよ…。』

戦いのほとんどで黒羽はウィザードとディーバの状態でしたので、その2つについては極めていた。

ホワイト『ディーバでこっそりイタちゃん達のサポートしたり、ウィザードの回復呪文で怪我治してあげたりもできてたしね♪』

黒羽『はは…（苦笑）、けどあれ絶対怪しまれてたよ。』

ホワイト『まあ…仕方ない仕方ない。』

二人は姿こそイタリア以外に見られはしてないが（イタリアに見られたのも最初の接触だけだが）、ディーバの時は歌声を聴かれ、

ウィザードの時は（癒しの）光を見られてしまっていた。

ホワイト『それで今は何になってるんだっけ？』

最後の戦いのときはトニー（？）が2体同時に出てきたので、二人はそれぞれ1体ずつと戦っていた。そのためホワイトは黒羽が今、何と何を掛け持ちしており、どういう風に戦ったのか知らなかった。

黒羽『今はね…ウィザードとソードナイトを掛け持ちしてて、マジックナイト（魔法騎士）で戦ってるよ。』

ホワイト『ふーん…じゃあほ僕と同じ戦い方してるってことか。』

黒羽『そうだね。』

ホワイト『………………。』

黒羽『………………。』

黒羽とホワイトは沈黙しながら、これまでのことを振り返っていた。

ホワイト『…………これからのことについてでも話し合う？』

黒羽『そうだね。じゃあまず………………。』

それから二人はこれからのことについて話し合い、その後、休憩していた。

15分(?) 後

黒羽『!：ホワイト、私達がイタリアさんと会ってから結構時間が経ったよね?』

黒羽は突然、何かを思い出したようにホワイトに話し掛けた。

ホワイト『うん、そうだね。でもそれがどうかした? 黒羽。』

黒羽『だとしたら、もうすぐあのイベントが起こるかも…。』

ホワイト『あのイベント? あっ…。』

ホワイトは黒羽の言う【あのイベント】が何か一瞬分からなかったが、すぐに思い付き声を上げた。

黒羽『早く行かないとプロイセンさんとフランスさん、アメリカさんが危ないかも。』

ホワイト『急ごう!』

黒羽『分かってる。さあ、ホワイト。』

黒羽はホワイトに左手を差し伸べ、ホワイトはその手を取った。

黒羽『行くよ…』

光よ、我らを導き運び給え…テレポーション!』

黒羽とホワイトは淡紫色の光に包まれ、姿を消した。

2階

フォン……

ホワイト『とうちゃく☆（小声）』

黒羽『成功したみたいだね。（小声）』

二人は黒羽の魔法で2階の階段の傍に着いた。

ホワイト『…あっ！！フラ兄見っ（黒羽『しーっ！（ガバッ）もぐもぐ。』

ホワイトはフランスが丁度廊下を曲がるのを見て声を上げ、黒羽は咄嗟にホワイトの口を塞いだ。

ホワイト『ムグ…ぷはー！黒羽、今のって！』

黒羽『フランスさん…だったね。』

ホワイト『んじゃ、早速作戦決行だね♪健闘を祈る！』

ホワイトは黒羽の方を向き、右手で敬礼をした。

黒羽『了解。そっちもね！』

黒羽も口元に笑みを浮かべながらホワイトに敬礼（右手）を返した。

ホワイト『メリカとロッ様とカナちゃんは任せて♪』

黒羽『私もプロイセンさんとフランスさんのこと、護るよ。』

そうして二人はお互いの武器をクロスさせるようにして一度、カシャンとぶつけた。

黒羽は魔力の籠った大剣を両手で持ってフランスの後を追ひ、ホワイトは柄に雷の紋章が入った刀を片手に1階へと階段を駆け降りるのだった。

第三話 休憩。そして作戦会議（後書き）

次話は、連合十カナダが館に来る話の予定です。

感想お願いします＞（（（＜

第四話 連合国十カナダ、館に到着（前書き）

連合国十カナダが館に来ます。

黒羽・ホワイトは全く出てきません。
動画を文章にしただけの話です。

第四話 連合国十カナダ、館に到着

館の入り口

【ある館】の入り口に連合国十カナダが集まっていた。

中国「本当にこんな所あったあるか！」

中国が目の前館を見て、声をあげる。

イギリス「噂だと思っていたんだが…あるもんだな。」

イギリスも館を見て、「同感だ」とでも言うように呟いた。

フランス「この寂れた感じが、雰囲気あっていいんじゃない？」

カナダ「僕はあんまり気乗りがしないんだけど…。」

カナダは少しおどおどしながら言った。のだが…

アメリカ「？今なんか声がなかったかい？」

ロシア「またまたアメリカ君たら〜！何にも聞こえないじゃない〜」

幻聴と思われてしまった。

カナダ「……………」

黙りこむカナダ。

アメリカ「それにしても……なんかあまり楽しそうな場所ではなさそうだね。」

アメリカはどうにも嫌な雰囲気を放つ館を見て不安そうに言った。

イギリス「……。」

イギリスは黙って館を見つめた。

ロシア「まあちょっと見て帰ればいいんじゃない？夕方前には出られると思うんだ。」

中国「そうあるな。我もあんまり長居したくねえある！」

ロシアはいつも通り楽しそうに笑い、中国もそれに同意した。

フランス「んじゃ、取りあえず入ってみるか。」

ガチャツ、ギイイ…

扉は鈍い音を発てながらゆっくりと開いた。

そして連合十カナダは館へと足を踏み入れるのだった。

玄関

ロシア「お化けが出るって噂があるんだよね。だから誰も近寄らな

い…。」

館に入り、ロシアはアメリカとカナダの前で口を開いた。

アメリカ「確かに。なんだか薄気味悪い所なんだぞ。」

カナダ「あれ？珍しいねアメリカ。怖いのか？」

普段なら人前では怖がらないアメリカの言葉を不思議に思ったカナダがアメリカに声を掛ける。

アメリカ「違うよ！でもなんか……あれ？中国達がいらないじゃないか。」

玄関にいるのが自分達だけなのによりやく気付いたアメリカ。

ロシア「えーとね。1階は任せたって言って、さっさと2階に行っちゃったみたい。」

アメリカの疑問にロシアはニコニコと笑いながら答えた。

アメリカ「フーン。じゃあ俺達は……」

バタンッ

大きな黒い影……トニー（？）がかなりの速さで三人、否アメリカへ迫っていった。

2階

フランス「中は思ったより綺麗なんじゃないの？」

イギリス・フランス・中国は2階に来ていた。

イギリス「そ、そうだけだよ…。なあ、帰らないか？」

いつも強気なイギリスは珍しく弱気だった。

フランス「なんだよイギリス。怖いのか？」

そんなイギリスをフランスがからかう。

イギリス「ちっちゃいよばか！！そうじゃなくて、なんかここ……。」

即座にイギリスはフランスに対抗した。だが、その顔はやはり不安そうで威勢がない。

中国「はあ。全く馬鹿馬鹿しいある。お化けなんか。いるはずねえ

ある。とつとと帰るよろし。」

中国は二人に呆れながら冷静に言い、奥の部屋に向かおうと1人歩き出した。

フランス「おいおい。一人で見て回るのか？」

中国「その部屋を覗いてみるだけある。少し異臭がするあるよ。」

フランスに話し掛けられ、中国はある部屋の前で立ち止まった。
…少々顔を歪めながら。

フランス「え。それマズくないか？ちょ、待てって！」

イギリスとフランスも中国を追って異臭のする部屋の前に来た。

フランス「なーんかここ、嫌な感じがしてたまらないっつか……。
本当に出そうだな。こりゃ。」

イギリス「……………」

無言になるイギリス。

フランス「お前さつきからだんまりだけどどうしたのよ？いつも
たいに変なのでもいた？」

フランスが威勢の無いイギリスを不審に思い、話し掛けた。

イギリス「……………。いねえんだ。何も。」

中国「ロシアとかその他は1階にいるあるよ。」

イギリスの言葉に中国は「何を言っているんだ？」とでも言いた
そうな口調で答えた。

イギリス「いや、そりゃ分かってるけどよ。ここ、そういうのが全
くいねえっつーか：なんつったらいいのか、そう言うのも含めて全
部、何もかも食われたって：感じが…」

イギリスは少し言いづらそうにしながらも、自分の感じているこ
とを素直にフランスと中国に伝えた。

フランス「いつもの幻覚が見えないってことか？幻覚すら食われた
空間ってことなら早々に引き上げるべきかもな。」

中国「その意見には同意ある。なら、我はさらに上の階を見てくる
ある。あへんはどうするある？」

中国もフランスの意見に賛成し、これからどうするかイギリスに聞いた。

イギリス「この階はあまり居たくねえ。俺も上の階に行くぜ。」

どうやらイギリスも中国と共に上の階を見て回ることにしたよう
だ。

フランス「あら。お兄さん一人？じゃあ、上の階調べてきたら、またここで落ち合うってことで。」

中国「了解ある。じゃ、2階は任せたあるよ。」

イギリス「30分もありや十分だろ。寝てんなよ。フランス」

フランス「任せなさいって。じゃ、また後でな。」

話はまとまりフランスは2階、イギリス&中国は上の階を見て回る
ことになった。

フランスは異臭のする部屋から離れ、どこかへ歩き始めた。

中国「フランスはあっちの部屋から見て回るあるか。」

フランス「そ〜。その部屋やばそうなんだろう？そんなの後後！」

そのままフランスは探索を始めた

イギリス「早く行こうぜ。アメリカを待たせると色々うるさそうだ。」

中国「お前顔色悪いあるな。こことの相性最悪そうある。」

中国はイギリスにそう言うのと、イギリスを置いて上の階へと続く階段に向かった。

イギリス「……………これほど『見えない』ことを羨ましいと思うとはな…。」

ぼそつ、とイギリスは呟いた。

中国「何か言ったあるか？聞こえなかったあへん。」

中国には聞こえなかったようだ。

イギリス「なんでもねえ。」

イギリスと中国は上の階へ上がって行った。

第四話 連合国十カナダ、館に到着（後書き）

次話はイギリス&中国が館内を探索する話の予定です。

感想や評価、お願いします!!

第五話 イギリスと中国へ探索へ（前書き）

イギリスと中国が3階・4階の部屋を見て回る話です。

ホワイトが少しだけ出てきます。

第五話 イギリスと中国へ探索へ

3階

3階に着いたイギリスと中国は、まず一番階段に近い部屋から探索を始めた。

ガチャッ

ドアを開けるとそこには数え切れない程の本が本棚に仕舞われていた。

イギリス「すっげー本の数だな。日本の方が詳しくそうだ。」

本を見てイギリスは世界会議の会場に残してきた友人、日本を思い出した。

中国「……はあ。日本と一緒に回りたかったある。」

イギリス「俺だってお前よか日本の方がいいぜ。そういえば日本から返事は来たか？」

中国は弟である日本と一緒に良かったと言い、イギリスも日本と一緒に良かったと言いつ返した。

それから、日本から返信が来たか尋ねた。

中国「返事？あぁ、メール送ったやつあるか。さっき見たら、圏外だったある。」

イギリス「あ、俺もだ。電波悪いのか……。日本も来たがってたら大変だな。早く出ようぜ。」

イギリスと中国、どちらのケータイも館内では圏外になっていた。

中国「日本が来たがるとは思えねえある……。」

イギリスと中国は図書室をでて、3階にあるもう一つの部屋へと向かった。

ガチャッ

部屋の真ん中には1台の真っ白なピアノがあった。また、部屋全体が異様な程、白く塗り潰されていた。

イギリス「なんか気になるな。この部屋。」

部屋の中にはピアノと棚が4つあるだけだった。

3階には特に変なものがなかったので、イギリスと中国は4階へと上がった。

4階

二人は階段傍の部屋を先に調べ始めた。

ガチャッ

部屋には

- ・ベッド
- ・ソファ
- ・テーブル
- ・カーペット
- ・クローゼット
- ・タンス
- ・レバー

があった。

イギリスはレバーの横の壁に貼ってある怪しい紙を読んだ。

イギリス「なにになに？」

「上は天国。真ん中は地上。下は地獄。」

か。」

紙には不可解な言葉が記されていた。

イギリス「下手に動かさねえほうがいいな。」

何が起こるか分からないので、イギリスはレバーを放置することにした。

二人はもう一つの部屋へ来た。

ガチャッ

今度の部屋には
・テーブル

・イス

・棚

・タンス

・怪しげな赤い椅子
があった。

イギリス「お！これは！」

イギリスは怪しげな赤い椅子を見て、少し嬉しそうな声を出した。

中国「趣味の悪い椅子あるな。どこぞの呪われた椅子みたいある。」

イギリス「……………」

黙るイギリス。

イギリス「で、結局4階まで来ちゃったけど……別に普通だったな。
空気は最悪だが。」

中国「まだ嫌な予感は消えてねえある。フランスと合流してとつと
と帰るよろし！」

中国も気分が悪くなる程では無いが、嫌な感じはしていたらしい。

イギリス「だな。んじゃ、とつとと……………」

バンツ

パパン パパン パパン

下から銃声が響いた。

イギリス「この音…」

中国「アメリカの拳銃の音あるか？あいつ発砲しすぎある。」

イギリスと中国は慣れているのか、冷静に言った。

イギリス「と言うか、何かあったんじゃないか？」

中国「こんな場所であるか？ロシアの挑発にでも乗ったんじゃないか？あるか？」

イギリス「しょうがねえな。あいつら割と本気でじゃれ合うからなあ…」

中国「いや…じゃれてるのはまた違う気がするある。とにかく、フランスと合流して見に行くよろし。」

イギリス「っはぁっ！しょうがねえなっ！！」

イギリスは大きなため息をつき、フランスと合流するために2階に戻ろうと部屋から出ようとした。しかし…

イギリス「ん？何だこの紙？」

イギリスは赤い椅子の近くに落ちている紙に気づき、拾い上げた。

イギリス「なにになに？」

「ピアノは奏でる鍵へのコード、鍵は開くよタルタロスの戸」

…どういう意味だ？」

紙には先程のレバー横の紙と同じように不可解な言葉が記されていた。ただ、先程の紙とは違っていたのは…

中国「何あるか？このマーク。」

紙の最後に黒い羽根と白い羽根で作られた十字架のマークが入っていた。

イギリス「…一応持っていくか。」

イギリスは紙をポケットに仕舞った。
二人は4階を後にした。

スツ（ホワイトが姿を現す音）

ホワイト『ふう〜。ギリギリセーフ！！危なく時間切れになるところだったよ。』

ホワイトはほんの数秒前まで「トランスペアレント」という魔法で透明になり、赤い椅子の後ろに隠れていた。

ホワイト『「ヒント」を書いた紙にも気づいてくれたし…ま、良かった良かった。』

先程の紙はホワイトと黒羽が用意したものだった。

ホワイト『ほんじゃま、もう少しイギギとにーを見守っておきま
すか♪』

…形はあれど姿は見えず、触れこそすれやはり姿は見えぬ……トラ
ンスペアレント!』

ホワイトは呪文を唱えると透明になった。

そしてイギリスと中国の後を追いつ、3階に降りていった。

第五話 イギリスと中国へ探索へ（後書き）

次話はイギリス・中国がフランスと合流するために2階へ行く話です。

第五話 イギリスと中国 〽2階にて〽(前書き)

イギリスと中国が2階であれこれ話す話です。

今度は黒羽もホワイトも出てきます!…少しだけですが…

第五話 イギリスと中国 く2階にてく

2階

イギリス「15分か…。」

二人が2階に着いてから15分が経った。

イギリス「……フランスのやつ、来ないぞ?」

でも、フランスは姿を現さない。

中国「どうということあるか? 2階なんかすぐに見終わるはずある。」

イギリス「待つのに飽きてとつと下に行ったんだろ?」

イギリスは半ば呆れるように言った。

中国「……まあ、確かに飽きる要素はあるね。入れ違いになると面倒あるから、軽く2階の部屋覗いてくるある。お前はここで待ってるよろし!」

イギリス「そうだな。入れ違いになるとまた面倒だ。」

イギリスは階段下で待機し、中国は2階の部屋いくつか覗いた。そして例の異臭のする部屋に来た。

中国「薪を燃やした跡……あるか。異臭はこれが原因あるね。」

中国は納得するように暖炉を見た。

中国「……………」

暖炉の中をじっと見つめる中国。

中国「……………は？」

中国は暖炉の中に【あるもの】を見つけ固まった。

中国「これ、もしかしくなくても……日本の服、ある。」

中国は半分焼けた日本の服を暖炉から取り出した。

中国「な、なんでこんなに血の跡がついてるある…。暖炉の中…色んな物が燃えた跡があるね。でも、何を燃やしたのか分からねえあ

る。」

中国は日本の服を持って階段下にいるイギリスのところへ急いだ。

イギリス「どうだった？いたか？」

中国「……………」

イギリス「お前…顔真っ青じゃないか！な、何持ってるんだよ…」

中国「に……日本の服ある……。半分は燃えてしまったあるが…。」

中国はイギリスに見つけた日本の服を震える手で見せた。

イギリス「これ…血、だよな？え？日本の服って……まさかアイツ等！！」

イギリスも顔を青くしながら叫んだ。

中国「ここは危険ある！でも、日本がいるんなら話は違うあるね！
我は日本を探してから帰るある！！」

中国は「弟がいるなら話は別だ」と声を裏返して叫ぶ様にイギリ

スに言い放った。

イギリス「お、落ち着けって！冷静に考えてみろよ！何で日本がここに来ているんだよ。」

イギリスは何とか取り乱している中国を落ち着かせようとした。

イギリス「いいか？俺達は、アメリカのアホな話に乗って面倒だけど暇つぶしがてらに来たんだぞ？」

中国「だから何がおかしいあるか！」

痺れを切らした様に中国はイギリスに怒鳴った。

イギリス「お前言ったよな？日本にメールを送ったって。日本と直接世界会議の会場で話した時、あいつは『善処します。』って、いつも通りめんどくせえ！とか思って来なかった。

で、この館の中に入る時に『今着いた』ってメール送って、あいつから『気をつけてください』って返事が一度だけ来ただろ。でもそれは、日本が【世界会議の会場】から送ったんだぞ！？」

中国「！あ……。」

中国はイギリスの話を聞き、日本がこの場にいる事は有り得ない

と分かったようだった。

イギリス「ちゃんと考えろ。あいつは今、世界会議の会場にいる！俺等より先に来ていることは「有り得ない」んだ。」

中国「じゃ、じゃあこれは何あるか！この服は、日本が今日着ていたのと同じある！なんで同じ服が、真新しい状態で暖炉の中で燃えていたあるか！」

中国は日本の服を強く握り締め、イギリスに言い放った。

イギリス「それは…」

理由が思い付かず、さすがにイギリスも言葉を詰まらせた。

中国「フランスもいねえある。アメリカは何か発砲していたある。ここはおかしすぎるね！我、皆に相談してくるある。」

イギリス「分かった。とにかく戻ろうぜ。日本のだって可能性は…：…確かに絶対とは言えねえかもしれん。」

二人は珍しく意見を揃えたと他のメンバーが居るはずの1階へ向かった。

スッ（ホワイトが姿を現す音）

ホワイトはポケットから大きさ6cm、楕円形の銀色の石を取り出した。

ホワイト『もしもし黒羽、聞こえる？』

黒羽『…もしもし、ホワイト？聞こえるよ。』

石からは紅い光が出てきて、紅い光からは黒羽の声が聞こえてきた。

ホワイト『イギギとにーに、1階に行ったから。』

黒羽『そうなの？…分かった。ロシアさんとカナダさんは【あいつ】と交戦中だよ。なんとか戦えてるけど、ちょっと危なそう。』

ホワイト『そっか。…あ、ヒントの紙はちゃんと二人の手に渡ったよ！…解読はできてなかったけどね。』

黒羽『はは…やっぱり解説はカナダさんに任せないといけないね。』

ホワイト『カーナーン！カーナーン！！』

ホワイトはとても楽しそうにコールした。

黒羽『あ…イギリスさん達が来たみたいだから、通信切るね。』

ホワイト『OK☆…黒羽、気を付けてね。』

黒羽『うん！大丈夫だよ。』

ホワイト『じゃあ…また後で♪』

黒羽『また後で。』

スー…

紅い光は空気に溶けるようにして、消えてしまった。

ホワイトは石をポケットに仕舞い、後で落ち合う予定になっていたるピアノの部屋へと、トニー(?)を警戒しながら向かうのだった。

第五話 イギリスと中国 〽2階にて〽 (後書き)

次話は1階でイギリス・中国・ロシア・カナダ・日本が集まる話の予定です。

感想、評価お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8761y/>

ヘタ鬼 ～トリップ!!皆で脱出しようね。～

2011年12月3日11時59分発行